

## 帰国研修員インタビュー

### ■第1回■ 石川・セルジオ



フランスのマクロン大統領の言葉を借りれば、地球は1つしかなく、宇宙には人類の住処となる他の代替惑星はありません。

ブラジルでは10月に「子どもの日」と「教師の日」の祝日があります。これを機会に、地球の環境保全と持続可能性のために、将来のリーダーとして活躍する児童や若者の教育における教師の役割の重要性を強調したいと思います。

今日の大人の義務は、児童に自然の魅力に触れさせることで、環境保全の重要性と環境にプラスの影響力を発揮できる可能性を児童に認識させることです。

たとえば、サンパウロ州のカサパーバ市では、2014年から2021年にかけて、同市と日本の島根県との連携を通じたJICA草の根技術協力事業において、環境教育事業が実施されました。

事業実施を通して、児童の教育を通じて市民、保護者にもその教えが伝わっていくことが分かりました。その結果、カサパーバ市が2022年8月に環境教育プログラム制定の法令化を承認するまでに至っています。

通常業務の中でも読書会やおしゃべり会等の教育活動を通して、児童の環境意識の向上に取り組んでいるブラジル全国の先生方に対し、感謝を申し上げます。アメリカの先住民が伝える通り、「地球は先祖が私達に残したのではなく、私達の子孫のために借りているもの」なのです。

\*石川セルジオ氏は帰国研修員。Programa Shizen Ambientalの提案者。サンパウロにて日本人の父と日系人2世の母から生まれた日系3世。2021年に立ち上げられた「Shizen Ambiental」環境教育プログラムの提案者。過去にはブラジル島根県人会の会長、2014年～2018年

にはサンパウロ帰国研修員同窓会  
(ABJICA) 会長を務めた。

**“「島根県での研修期間中、地域住民が自然や持続可能性を尊重するのは環境教育の成果であることを理解しました」“**

(1) JICA を知ったきっかけについて教えてください。

2011 年、JICA の日系社会研修「防災・環境保全に配慮した教育施設建築技術」の研修生として島根県に滞在しました。

研修応募に当たり、JICA ブラジル事務所の効率的な対応と JICA 横浜センターの受け入れ体制に感銘を受けました。

3 ヶ月の研修期間中は、島根県の教育施設の建設技術を始め、環境保全と持続可能性を配慮する同県の技術について多いに学びました。

研修が終了したのち、私はどのように日本で身に着けた知識を実践できるか、大きな課題に直面しました。

ブラジル帰国後、しまね国際センター (SIC) と連絡を取り合いながら、サンパウロ州内の教員を対象に環境教育指導企画の実現について検討を始めました。



若き頃の石川セルジオ氏

SIC が技術・資金的な支援を JICA 本部に求める一方で、私は同企画の受け皿となるブラジル側自治体地域の調査を開始しました。

2014 年、長い準備期間の後、JICA のサポートもあってサンパウロ州内のカサパーバ市でのパイロット事業の実施がようやく実現しました。

(3) 島根県とカサパーバ市の草の根技術協力事業の成果について教えてください。

プロジェクトではカサパーバ市、教育局、教員と、何よりも児童を中心に取り組みました。事業活動の成果は予想をはるかに超えました。

教員は環境保全・持続可能性の重要性について、従来とは違ったアプローチで児童に教えることができるようになりました。教員の生き生きとした指導の様子の変化は明らかでした。

2022年8月30日、サンパウロ州カサパーバ市にて環境教育プログラム制定の法令5976号が制定され、同市の市官報に掲載されました。同法令は、事業活動の大切な成果であると評価しています。

また2014年から2021年の7年間の事業実施にあたり、当時の有馬毅一郎 SIC 理事長兼島根大学教授、プロジェクト参加者、及び専門家のご尽力に対し深く感謝を申し上げます。

(4). 「Shizen Ambiental」環境教育プログラムはどのように生まれたのでしょうか。

7年間の草の根技術協力案件が成功を収めて終わりを迎えたころ、今度はその方法論を他地域、他教育機関に普及することが課題となりました。



島根県から渡伯した環境教育専門家とカサパーバ市教員の会議

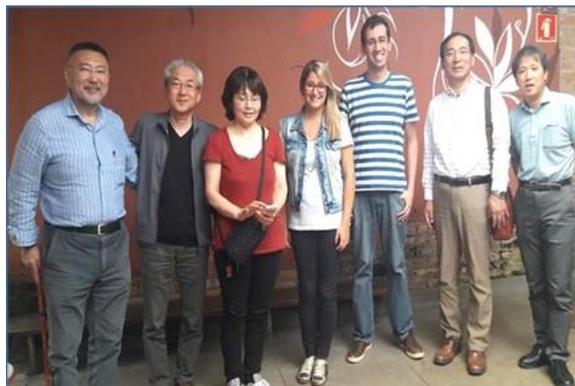


カサパーバ市が取り組む環境教育の授業

そこで SIC と JICA のサポートを得てブラジル島根県人会の内部に Shizen Ambiental という環境教育部門を創設しました。

過去の事業の教員や専門家を、帰国研修員のマルシオ・ホシャ・デ・ソウザ先生を先頭にして巻き込み、日本型の環境教育の方法論を普及し始めました。

私自身も 2016 年～2019 年はブラジル島根県人会の会長を務めました。現会長の福間エジソンさんは Shizen Ambiental の活動を積極的にサポートしてくれています。



ブラジルの環境保全関係機関を訪問した SIC し  
まね国際センターの方々に  
同行するセルジオ氏

(5). Shizen Ambiental の主な活動を教えてください。

2021年12月にサンパウロ州サン・ベルナルド・ド・カンポ氏にある日系教育機関「アルモニア学園」に Shizen Ambiental の方法論の導入が決定しました。2022年1月より、同教育機関に日本型の環境教育の導入に励んでいます。

また、2022年7月24日に、環境をテーマに島根県の学生による100枚以上のイラストの展示会を開きました。同日に Shizen Ambiental の訓練を修了した7名の教員、専門家に修了証明書を与えました。

了生7名は、今後は Shizen Ambiental 法論を各地域にて広げるよう努力していきます。



島根県への表敬訪問を行った  
カサパーバ市研修員

(6). これまでの体験、経験に基づいてブラジルの環境教育の改善についてご意見をお願いします。

ブラジルの場合は、基礎教育課程の教員への訓練を通じて環境教育の実施体制は改善可能と思います。また PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルを通じて方法論の実践の継続的な評価も必要と考えます。

Shizen Ambiental の方法論は、各地域の状況に合わせてカスタマイズが可能です。

また、ブラジル国内の各地の教員は、すでに環境教育において多数のイニシアチブを実施していることを評価するべきと思います。私たちの方法論は、その多数のイニシアチブの一つとして、ブラジルの環境教育への貢献を目指しているものです。

Shizen Ambiental のみが正しいというわけではなく、既にブラジル国内で実施中の他の取り組みに加わる形で貢献し続けられればと願います。



ジャパンハウスにて開催された環境教育セミナーに登壇した石川セルジオ氏

(7). 島根県の教員、専門家が残した学びと成果について教えてください。

「観察」、「考察」、「行動」の3つの柱を中心として、児童に自然、環境、持続可能性への関心を抱かせることが最も重要な教えだったと思います。

また環境教育を一つの授業扱いせず、算数、国語、化学、歴史、地理等の授業の中で横断的に教えることも重要です。

そして、授業で活用した方法論の振り返りと評価が教育の改善に繋がることを理解するのも大切であると考えます。



環境をテーマにしたイラスト展示会  
(場所：ブラジル島根県人会)



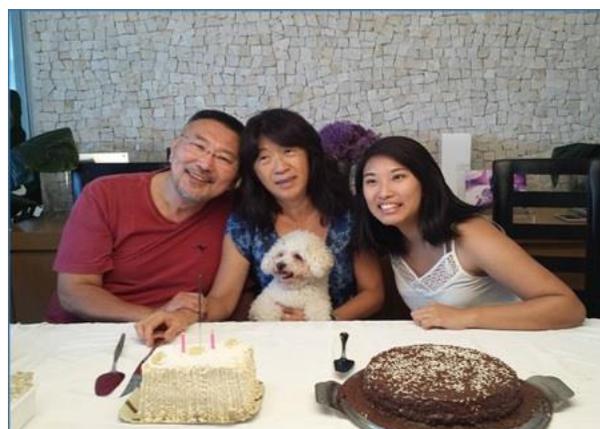
アルモニア学園に導入された  
Shizen Ambiental プログラム

(8). 島根県とカサパーバ市の草の根技術協力事業は基礎教育課程の青少年が対象でしたが、ポストコロナの環境意識向上の必要性において、若い世代はどのような役割を担うでしょうか。

環境保全と持続可能性を児童に教えるのは大切な基本だと思います。児童は、ブラジルの将来を担う役割を果たします。

私は、児童は保護者と周囲の人々に影響を与える能力があると思っています。

ブラジルは、UNESCO の加盟国として2030年まで全国に環境教育を導入することに合意しており、すでにブラジルはこの目標達成には遅れていますが、長い道に見えるようで実は最も手早い手段は児童の環境意識を向上させることなのです。



石川一家

(9) サンパウロ帰国研修員同窓会 (ABJICA) の元会長として、帰国研修員がどのように

ブラジルに環境教育に協力できるか、教えてください。

帰国研修員の大半はすでに何らかの形で環境教育の実施に貢献しています。例えば、彼らは廃棄物リサイクル、都市廃棄物の処理、防災、科学調査等の分野で活動しています。これらの活動は環境教育と密接な関連性を保っています。

アイデアとしては、環境教育、環境保全の広報・促進を目的としたより効果的な行

動を把握するために、将来的に帰国研修員同窓会が協議フォーラムを開催できれば理想的と思います。

(10). 環境教育の重要性を纏める名言を教えてください。

「(私達の地球に代わる)地球 B は存在しない。よって、環境においては、プラン B は無い。(仏マクロン大統領)」



■石川・ひろあき・セルジオ (石川 セルジオ 博暎)

おうし座。2010年にサンパウロ帰国研修員同窓会 (ABJICA) に入会。趣味は蘭の栽培、ガーデニング、釣り。好きなことわざは「郷に入っては郷に従え」、「為せばなる、為さねばならぬ何事も」。